

意思疎通の極意

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

意思の疎通（コミュニケーション）は、こんなに全身に染みてくるものであろうか。不思議でたまらない。

殊に（ことに）言語（母語（ぼご））が異なる者どうしが、お互いの意思を交換・理解することはかくも自然にできるようになることかとしみじみと思った。珈琲にミルクを注ぐときの白色が黒色に溶け込んでいく感覚である。

意思の疎通は、相手がいることが絶対条件であり、しかもいつも近き場所にいることが不可欠な条件である。これらの条件に好奇心と傾聴心が絡み合えばこういう感覚を得るのはそう難しいことではない。とにかく言葉を発するのである。発音は気にしなくてよい。心をこめて発すればよいのである。

日常的な会話から始まり、教育問題、賄賂の横行などの社会情勢、困り事などの身の上話などの話も手に取るように理解できる瞬間がある。

今回のホームステイで得た最大の収穫であった。

さあ、諸君もやってみたまえ。

昔日、何かで「吾」という言葉について、五本の指で口をふさぐということだが、これは悟りを開いても他言しないことを意味するのだということであると説明されていたように思う。漢字は表意文字だから、どのようにも解釈することができるのである。

ただ、意思の疎通は悟りとは違うので、小生はあえて他言することにする。

（注）

母語（ぼご）： 幼少期に自然に習い覚えた言語のこと